

PROGRAM

デュボールのメヌエットによる9つの変奏曲 K.V.573	モーツァルト
アダージョ 短調 K.V.540	//
ソナタ 変イ長調 作品110	ベートーヴェン
ソナタ 短調	ショパン
12の練習曲	シマノフスキー

インタビュー 安倍紀子

四季のコンサート 秋

1987年10月9日(金) PM 7:00

浜松市民会館ホール

主催：浜松音楽友の会

1984年、第2回フランクフルト国際コンクールにて、第一位優勝、並びにリサイタル賞を獲得。二つの国際コンクール優勝後、ロンドンに在住、マリナ・オルチオに師事。1985年3月、ロンドン、ウイグモアホールでデビュー・リサイタルを行い、絶賛を博す。

「デビューとはとても信じられない」(ザ・タイムズ紙)。「疑いもなく将来のスター」(テイラー・テレビジョン紙)。その後、BBCラジオ録音をはじめ、ヨーロッパ各地で演奏活動を続ける。

日本には、毎年秋に1ヶ月程帰国、演奏活動を積み重ねている。回を重ねるごとに変化充実していく岡田の評論は、国内外で高まるばかりで、日本の音楽界の未来を担う大器である。

「彼こそは、世界をリードする真の芸術家になるであらう」(フニー・フイッシャー)。

1958年生まれ。安藤仁一郎氏、森安芳樹氏に師事。

1979年、桐朋学園在学中に、第48回日本音楽コンクールで第一位優勝。

1981年、桐朋学園音楽学部を首席で卒業。

1982年、第28回マリナ・オルチオ国際コンクールで第一位優勝、及びスヘイ音楽解釈特別賞を受け国際的に高く評価される。

1983年、第2回日本国際音楽コンクール(日本演奏連盟主催)ピアノ部門第一位。驚異的に完璧なテクニックと見事に洗練された音楽性は、審査員と聴衆の圧倒的な支持を得た。

岡田博美 (ピアノ)

フランクフルト

岡田博美 ピアノリサイタル



モーツァルト (1756~1791)

モーツァルトはすぐれたピアニストでもあった。22曲のピアノ・ソナタと並んで、彼が生涯を通じて作曲し続けたもう1つの重要なピアノのジャンルは16曲ほどの変奏曲である。モーツァルトの最後のピアノ・ソナタは1789年に書かれているが、最後の変奏曲は没年の1791年の作品である。「デュボールのメヌエットによる9つの変奏曲」(1789年作曲)は、ベルリンのフリードリヒ大王の御前で、モーツァルトがピアニストとしての腕前を披露するために作曲されたと言われている。その主題はデュボールという作曲家のメヌエットであるが、デュボールは1733年にフリードリヒ大王に招かれて宮廷楽団の首席チェロ奏者となった人で、チェロのための作品などを残している。今夕演奏されるもう1曲の「アダージョ」は短調は感情表出の豊かな小曲で、1788年に作曲されている。

ベートーヴェン (1770~1827)

ベートーヴェンは32曲のピアノ・ソナタを書いている。今夕演奏される変イ長調のソナタは31番で、1821年に作曲されたものである。ベートーヴェンは後期になると種々の実験的な試みを行い、新しい結式や手法を積極的に取り入れているが、この31番のソナタでもそうした特徴が目立っている。例えば、ソナタに特有の緩徐楽章がないため3楽章構成になっている点、フィナーレがフーガという古風な手法による楽章になっている点などである。第1楽章は叙情的な表情のモデラートでソナタ形式になっているが、その展開部はベートーヴェンにしては極めて短い。第2楽章はアレグロで3部形式であるがスケルツォの性格が強い。第3楽章のフーガでは主題が次々と変形され、「嘆きの歌」「疲れはて嘆きながら」「次第に元気を取り戻しながら」といった言葉と共に独創的に扱われていく。

ショパン (1810~1849)

ポーランド出身のショパンは21才の頃からパリに定住するようになる。そこでリスト、メンデルスゾーン、ベルリオーズ、バガニーニ、ロッシーニ、シューマンといった当時の進歩的な作曲家達と知り合いになり、ピアノを中心とした彼独自の作風を作り上げていく。しかし、彼の3曲のピアノ・ソナタは、彼が古い伝統にも極めて熟達していたことを示している。つまり、そこにはハイドンやモーツァルト以降発達してきたソナタの伝統が受け継がれているのである。今夕演奏される第3番短調(1844年作曲)は、小曲を得意としたショパンにしては例外的であると言ってよいほどスケールの大きな作品である。ソナタ形式によるアレグロの大規模な第1楽章、スケルツォの伝統的な形式による第2楽章、3部形式の緩徐楽章、そして華麗なロンドン形式によるフィナーレという4つの楽章から構成されている。

シマノフスキー (1882~1937)

シマノフスキーはポーランドの作曲家である。彼の作風は変化に富んでおり、普通3つの時期に分けて考えられている。第1の時期は16才頃までで、ドイツにおいてワーグナー、ブラームス、R.シュトラウスといった後期ロマン派の作曲家達の音楽を学び多大な影響を受けている。第2の時期は32才頃までで、オーストリアを中心に活躍し、特にドビュッシーやストラヴィンスキーの音楽に深く感激し、自分でも印象主義的な作品を書いている。第3の時期は55才で亡くなるまでで、古代文化にあこがれ、祖国ポーランドの民謡を研究し、その音楽的特徴を生かした作品を多く残している。例えば、まるでショパンのようにポーランドの民謡を素材にしたマズルカを作曲している。今夕演奏される「12の練習曲」は、1916年つまり第3の時期に入ってからのものである。練習曲とはいっても高貴な叙情性にあふれている。